



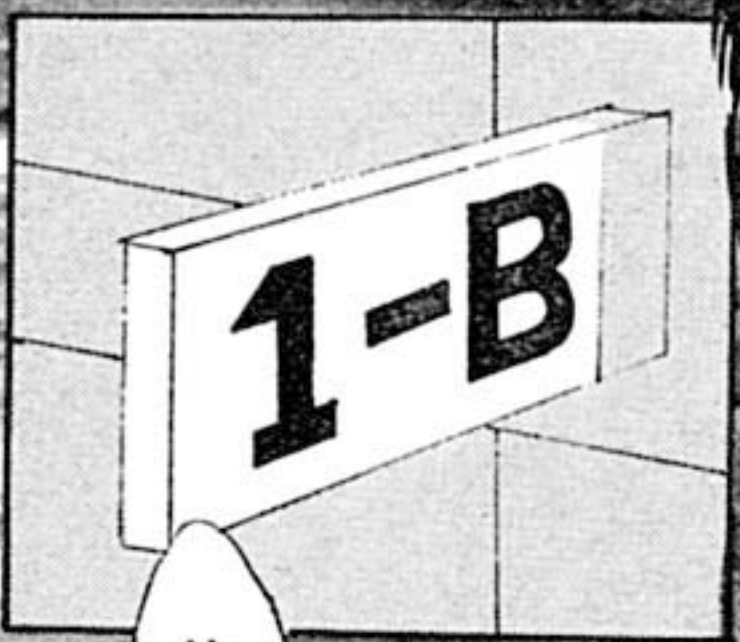
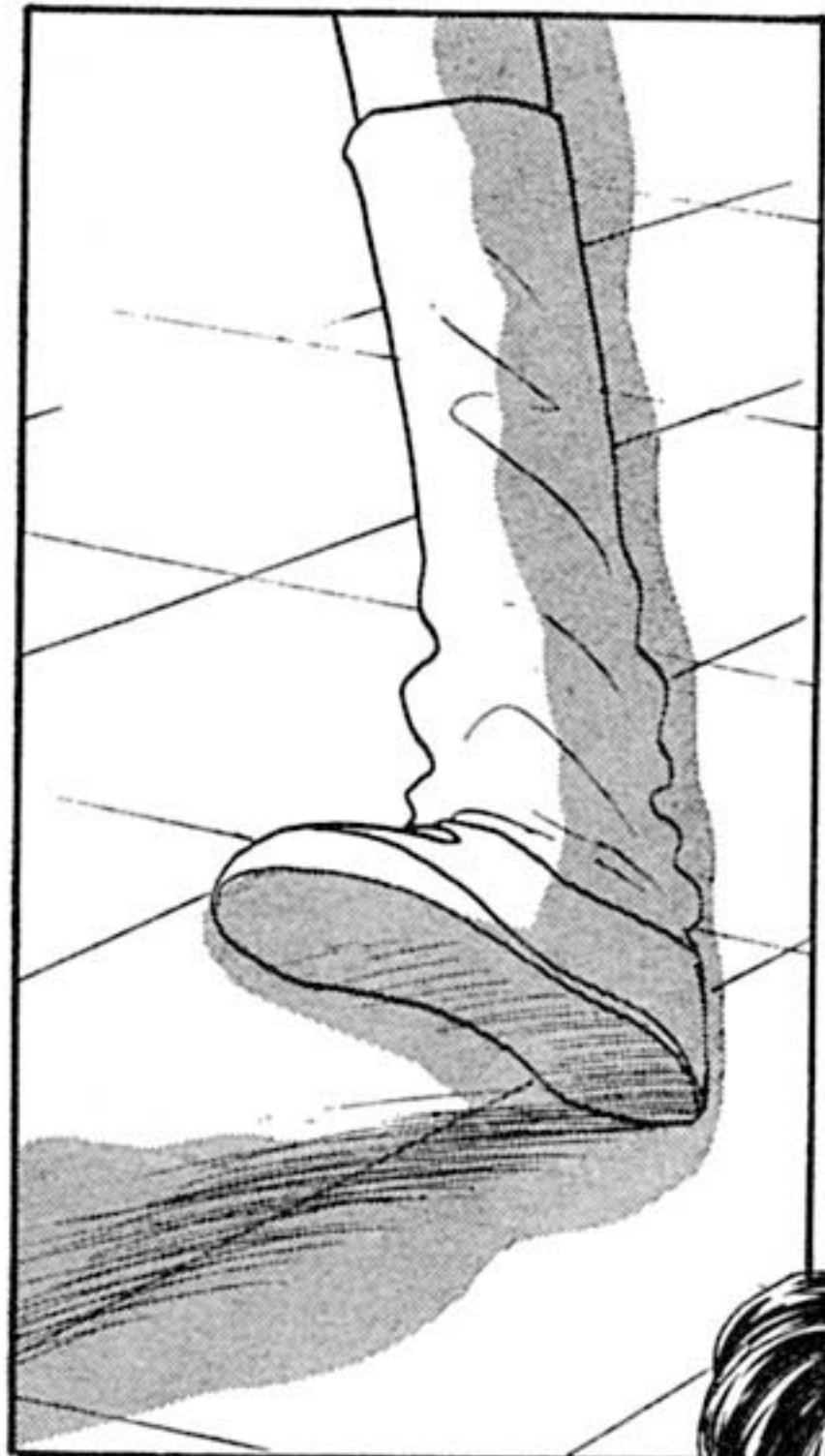
教  
卓

の  
教師と  
上  
で

OHTORI SEIRA

鳳 青良





結華…

委員会  
遅くなっちゃった  
結華  
待ってるのに





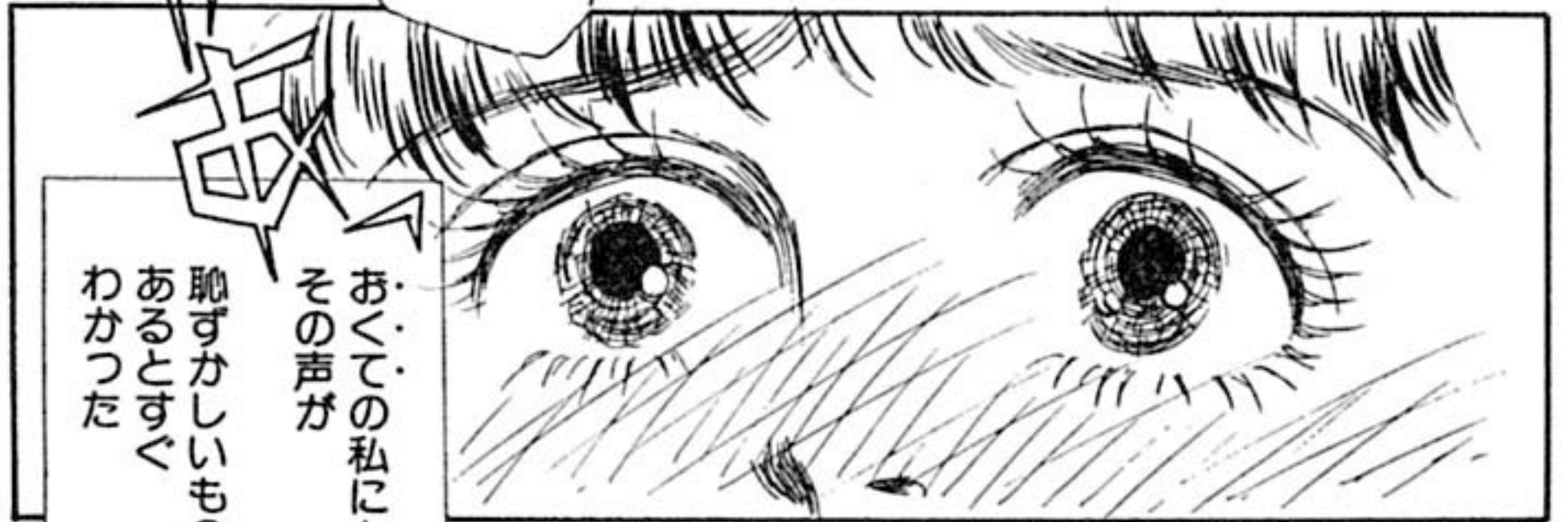


あ…先生

ん…

んん…

あ…  
は…ん



お…く…ての私にも  
その声が  
聴ずかしいもので  
あるとすぐ  
わかった



ああ…

先生…っ

わたしの  
双子の片われの  
||





「結核」

「キス」



あれは  
ティープキス  
っていうの？

顔  
ナナメに重なってる



あ、  
動かしている  
唇重ねながら

すごい  
すごい

なんだか  
味わってるみたい  
相手のこと

あ

ダメだよ  
結核  
こんなキスしたら  
もう我慢  
できなくなる

息も絶え絶えの  
先生の声

我慢なんて  
しないで先生

好きなの

甘ったるい  
結核の涙声







お願い…



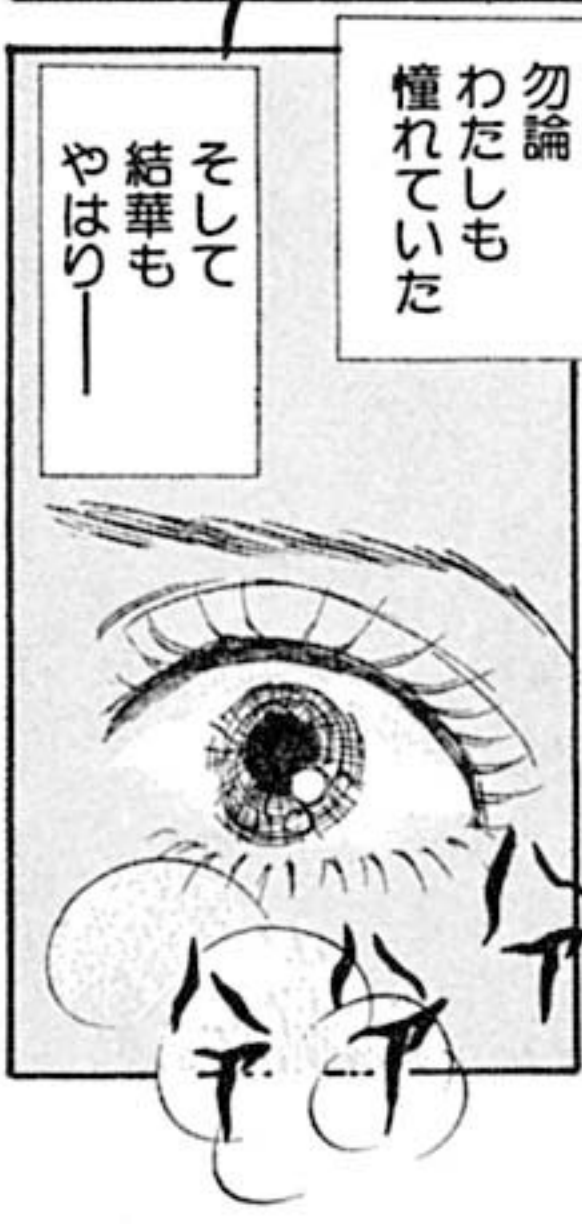
本当の恋を  
教えて

わたしを女にして



結華…

荒々しい吐息で  
先生の声は  
消え入りそうだった



そして  
結華も  
やはり—

勿論  
わたしも  
憧れていた



英語の園田先生は  
新任の若い教師で  
ポストン大学に  
留学経験があり  
女子生徒に  
圧倒的な人気が  
あつた



白い  
チョークを黒板に  
走らせる  
憧れの手が

結華の  
白いおっぱいを  
くるむように  
揉み始めた

嬉しそうに  
甘い声をあげる  
結華

あ……ん

わたしも  
声を  
あげそうに  
なった

あ

あ

あ……あ

あ……  
先生……

自分が  
揉まれているように  
乳首が堅く尖る







もう太股まで  
ぐつちより  
濡れていた



壊れそうな  
あえぎ声に  
誘われて

や  
いじめないで  
先生

ああ…ん

早熟だな  
結華は  
もう  
蜜が溢れてる





先生は結華を刺した

カッ  
カッ  
カッ

カッ

教卓の上で

わ・た・し・た・ち・は  
ロ・ス・ト・バ・ー・ジ・ン・の  
儀・式・を・済・ま・せ・た

